

魔法のピアノ上達法 第2回 チェルニー、C.F.E.バッハは語る！

第1回では、「よい音楽」、「よい演奏」の基本を少しお話ししました。よい演奏の基本的な要素は、大まかに5つあります。それは、「強弱」、「テンポ」、「リズム」、「拍子」、「フレーズ」なのですが、それらのことについて、あの練習曲集で有名なチェルニーと音楽の父、J.S.バッハの次男のカール・フィリップ・エマニュエル・バッハが、18世紀、19世紀に「ピアノ演奏法」の本に書いています。私たちが今、当たり前前に受け入れているピアノ演奏法は、古典派後期にすでに確立していたのです。チェルニーは、練習曲ばかりを書いていたのではなく、よい演奏を実現するための具体的な方法を教えてくれたのです。

さて、今回は、「リズム」についてお話ししましょう。次の譜例をご覧ください。この曲は、ベートーヴェンの最後のソナタ作品111の第2楽章の第3ヴァリエーションの一部です。この部分は、テンポも速い上に、リズムが複雑で、拍子もなんと、12/32拍子なんですね。12/32拍子というのは、4つの32分音符を1組にして、1小節に3組含まれるということで、基本的には、3拍子系なのですが、規則的なリズムと、タイを含んだリズムが混在していて、非常に弾きにくいのです。また、このようなジャズのようなリズムにクラシック系の音楽家は慣れていないという側面もあります。しかも、この曲は、ジャズの曲ではなく、ベートーヴェンの傑作なのです。ベートーヴェンが、最晩年の最後のピアノソナタになぜこのようなリズムを採用したのか、という点は、今回のテーマではないため、その理由の説明は別の機会に譲りますが、このリズムをどうしたら上手く弾けるようになるには、なんと、演奏スタイル、つまり、姿勢と重心と体幹を整えることが鍵になっていたのです。私がこの曲を最初に勉強した時（すでに、ん十年前ですが）、このような複雑で難解なリズムが上手く弾けず、当時は、ただ弾けるまで頑張る！！というような練習をしていたと思います。しかし、魔法のピアノ上達法で考えますと、このような難解なリズムを弾くためには、腰から下の方向に重心を置き、その安定した状態で、肩の脱力と瞬間的な指先への出力が実感できると、あっさり、弾けてしまうのです。そのためには、常に体幹を鍛えるのが大事です。頭や手足を支えている部分が体幹（胴体）ですが、その軸が安定しないと指先で行なう複雑なピアノ演奏がなかなか上達しないのです。ピアノが弾けるということは、指だけではなく身体すべてと頭脳を駆使しているとても高度な能力を持っているということです。次回からも、よい演奏を目指して、少し視点を変えてお話ししていきます。